

史遊会通信

NO.202 平成23年8月行
事務局 03-37120651 下山田方

九月講演要旨

幕臣たちの明治維新

太田精一

一はじめに

二百六十年間、一定の経済力を保ちながら、平和を維持し、高い教育水準と独自の文化を育んだ江戸時代は、今日の日本社会の基層となつて、息づいている。

この時代の国力は、少なくとも中期までは、西欧諸国に比べて遜色はなかつた。

だが、十八世紀半ばに起つた産業革命は、西欧諸国の経済力と軍事力を強大化させた。

その結果、幕末の日本は、これら諸国に大きく水をあけられ、その来航に、脅威を感じるようになつたのである。

英國の経済学者サイモン・クズネツによれば、一八六二年の一人当たりの日本のGDPは、七四ドルで、英國の十二分の一、

米国の九分の一と推定している。

当時の英國の人口は、約二千六百万人。

米国は三千四百五十万人である。ちなみにその頃日本の人口は、約三千万人であつた。

当時の日本の人口規模は、西欧諸国と比べて、必ずしも遜色はなかつたのである。

二・幕府機構と大名統治
幕藩体制は、中央集権的統治機構を持つ幕府と封建領主との二重構造の上に成り立っていた。

徳川幕府は、石高七百万石。当時の日本の米の生産量は、全体で一千九百二十万石であることから、四分の一を占めている。兵力は、旗本、御家人合わせて七万七千人、日本全体の動員兵力の四分の一である。

例会のお知らせ

◎ 10月例会

日時 平成23年10月21日(金)

午後2時～4時

会場 目黒区民センター 7階
社会教育館 第2研修室

講演 山本鎮雄氏

自由執筆 新井宏・柴田弘武
瀧澤中の諸氏

締切 10月末日(厳守)

テーマ 未定

◎ 11月例会

日時 平成23年11月18日(金)

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階
社会教育館 第3研修室

講演 村上邦治氏

テーマ 出雲国一宮熊野大社の盛衰
自由執筆 今年感動した3冊の本

会員及び友の会員

字数 19字25行(題氏名込)以内
締切 11月末日

政治機構は、大老、老中、若年寄、京都所司代、大坂城代、寺社奉行の職制に別れていた。

幕府は、直轄領からの米の徴収に加え①貨幣鑄造権②重要鉱山直轄権③重要山林直轄権④主要都市の支配権⑤貿易の独占権⑥冥加金の徴収権を有し、財源としていた。冥加金は、當業税のようなもので町衆から徴収し、その代わり彼等に自治権を与えていた。

一方、全国の大名には、領国支配を任せ、その統治方法について、幕府は細かく干涉しなかった。だが、領国内で反乱や一揆が起きた場合、所領の没収、削減、転封などをを行っている。

幕府は、大名が強大な力を持つことを怖れた。そこで、参勤交代の制度を設け、交代に要する費用を消費させ、財力の削減を図った。さらに、河川の護岸工事、城普請などの土木工事を各大名に負担させ、幕府出費の軽減に努めた。

参勤交代の制度は、結果として全国の商品作物を育て、物流を促進し、消費生活を拡大、経済全体の活性化に役立っている。

三、攘夷か、開国か

十九世紀を迎えると、財政悪化、権力の硬化化、先例主義などにより、制度疲労が生じた。

そんな時、強大な国力を背景に、世界進出を図る西欧諸国が、日本に対しても開国を迫つて来了。

その圧力に耐えかねた幕府は、安政元年（一八五四）日米和親条約を締結した。

だが、尊皇攘夷を標榜する公家及び諸藩の武士たちは、外圧に屈する幕府の弱腰外交を非難。開国か攘夷かで国論は二分した。

幕府内でも開国派と攘夷派が対立した。譜代大名で構成する幕閣は、「開国やむなし」とする者が多い。これに対し、旗本は、攘夷派が主流を占めていた。

最後の将軍徳川慶喜は、尊王攘夷の中心的存在であつた水戸家に生まれた。そのため、攘夷思想は、体に染み付いていた。

しかし、当時の国際情勢は、攘夷が困難な状況にあつた。慶喜が、将軍に就いた慶応二年（一八六六）には、旗本の間でも、開国やむなしとする意見が主流となつてゐる。慶喜も、開国へと次第に傾いて行つた。

就任当時の慶喜は、幕府を尊王開国へと

導こうとした。だが、時すでに遅く、幕府は、余りにも弱体化していたのである。

四、慶喜の決断

頭脳明晰な慶喜は、先を読む能力に優れ、将来日本の進むべき道を見通していた。そのためには、日本改造を断行しなければならない。が、幕府だけでは、荷が重過ぎることに気付いた。

彼は、朝廷に一旦政権を返上した上で、改めて新政府を構成しようとした。だが、朝廷には、政権を担うだけのノウハウもない。おそらく幕府の開明派と有力大名を中心にして、新政府を構成することになると、慶喜は読んでいた。

薩長は、そうなることを恐れた。武力によつて政権を奪取するしか、権力の座に着くことは出来ないと判断し、天皇の名のもとに倒幕の兵を上げた。

慶喜は、尊王思想の持ち主である。そのため、朝敵とされることを極度に怖れた。だが、徳川家は、存続させたかった。徳川の血を受け継ぐ者として、宗家を滅亡させるに忍びなかつたのである。

そこで、倒幕戦を仕掛けようとする薩長の誘発を回避する策に出た。ひたすら恭順

の道である。

この恭順策が功を奏し、徳川家は残った。だが、徳川家は、江戸を追われ、七十万石に減封され、駿府に移された。家達が、

十六代当主となり、慶喜の恭順は続いた。

減封は、幕臣たちの職を奪った。多くの幕臣たちは、職を求めて散って行つた。

軍人、警官を含め、新政府の官吏になる者。柔剣術、華道、茶道の師範になる者。商人、職人になって市井に埋もれた者もいる。集団で帰農する者もいた。

五、牧之原入植

牧之原の入植者たちは、慶喜の護衛に当つた精銳隊が中心になつてゐる。

慶喜が、江戸城を明け渡し、上野寛永寺大慈院に謹慎した時、警護のために結成された武力集団である。隊員二百人。全員旗本で構成されている。彼等は、慶喜が、上野、水戸、駿府に移る間、護衛に当つた。

だが、駿府に到着してもなお、恭順している慶喜の警護を続けることは、新政府を刺激することになると、駿府藩は判断した。精銳隊は、東照宮を守るという名目で、新番組と名を改め、駿府に留まつた。ところが、駿府藩は、俸禄を十分与える

ことが出来ない。そこで、同藩は、徳川家の所領金谷ヶ原の開墾を行ふとし、金谷開墾方という役職名を新番組に与え、千七百ヘクタールの土地を下賜した。

開墾方のリーダー中條景昭と大草高重は、新番組の隊士を率いて金谷ヶ原（牧之原）に入植した。勝海舟、山岡鉄舟等の助言もあつて、そこで茶の栽培を始めたのである。

武士が、刀を鍔に変えて入植したのだ。

農作業を始め、さまざまな困難に直面した。後から入植した彰義隊の生存者と新番組との摩擦、牧之原を耕場として使つていた

近隣農民とのトラブル、川越人足の入植、家禄奉還金の出資をもとに設立された金融機関での使い込み事件、など数多くの困難に直面した。だが、勝海舟、山岡鉄舟、大久保一翁などの旧幕臣たちの支援もあって、これらの困難を乗り越えた。

六、その後の牧之原

開墾を進めるうちに時代は大きく変つた。明治二年の版籍奉還、同四年の廃藩置県の後、廢刀令が出て四民平等となつた。

厳しい労働に耐えられず、入植地を人手に渡し、牧之原を去る者も続出した。開墾当初千人、二百四十家族の入植があつたが、

明治十一年には、百戸に減り、同三十年には、六十戸、昭和四十八年にはわずか七戸を数えるに過ぎない。

とはいゝ、牧之原全体の茶農家は、増加し、生産量は、飛躍的に伸びてゐる。平成十九年、日本の茶園の総面積は、四万八千二百ヘクタール。そのうち静岡県は、九千九百ヘクタールを占める。

また、全国の荒茶生産九万四千二百トンのうち、三万九千九百トンが静岡産で、牧之原の生産は、六千五百トンと全国の七パーセントとなつてゐる。

明治維新は、旧幕臣たちにとって、生活の基盤を根底から奪い去る大事件であつた。だが、彼等は、苦境にありながら、それぞれ生きる道を見出し、新時代の到来を受け入れて來た。主家を失い、それ以外の選択はなかつたのである。新政府への不満は、むしろ勝者側である西南雄藩で爆発した。明治維新が、単に徳川政権を倒すだけでなく、社会の様相を一変させ、生活の基盤である藩まで消滅することになつてしまつたのだ。

歴史は、必ずしも勝者だけに微笑をもたらすわけではない。

自由執筆

出雲大社造営時期 に関する一考察

村上 邦治

出雲大社の造営時期については、七世紀半ばが定説になつてゐる。

このよりどころとされてゐるのが、『日本書紀』

『日本書紀』（齊明天皇五年（六五九年）の条に「是歲。命出雲國造。修嚴神之宮」の記載があり、この嚴神之宮が杵築大社（出雲大社）にあたるとされている。

明治時代に編纂された『古事類苑』では

『釈日本紀』（ト部兼方 鎌倉時代末期）の「嚴神之宮 杵築神宮也、嚴重之儀也」

を援用し、嚴神之宮は出雲大社の別称としている。これらの事から出雲大社造営時期を七世紀半ばとすることが定着している。ところが『全現代語訳日本書紀』（宇治谷孟 講談社学術文庫）では「この年、出雲國造に命じられて神の宮（意宇郡の熊野大社）を修造させられた」として、嚴神之宮は熊野大社としている。この説をとれば出雲大社造営時期の根拠が失われることに

なる。改めて齊明天皇五年の条について考察してみた。

『日本書紀』のこの条には、引き続いて修造にまつわる二つの逸話が語られている。

最初に「狐噛斷於宇郡役丁所執葛末而去」とあり、全現代語訳では「そのとき狐が、意宇郡の役夫の採つてきた葛（宮造りの用材）を噛み切つて逃げた」としている。

続いて「又狗噛置死人手臂於言屋社」を同訳では「また、犬が死人の腕を揖屋神社のところに噛つて置いていた」とする。この言屋社は『出雲風土記』の伊布夜の社、『延喜式』の揖夜神社、現在の揖屋神社である。

この二つの逸話はいずれも意宇郡内でおきた出来事を記しており、五〇キロ以上離れた出雲大社造営に係る逸話とするには不自然である。嚴神之宮は同郡内にある熊野大社修造に係る逸話とするほうが自然である。当時の熊野大社は『延喜式』によると出雲国神社の筆頭にあり、出雲大社は第二位である。平安期（九〇一年）に編纂された『日本三代実録』に「貞觀九年（八六年）出雲國從二位勲七等熊野神、從二等勲八等杵築神、並びに正一位を授く」とあ

り、熊野大社が一宮であったことを裏付けている。このように社格からみても熊野大社とした方が相応しい。

『古事類苑』が援用する『釈日本紀』は鎌倉時代末期に編纂されたもので、既にこの時代では熊野大社は衰退してきており、『釈日本紀』の記述をもって出雲大社とするには大きな疑問が残る。また齊明天年の条では、「造」ではなく「修」としており、これを出雲大社造営とするより、既に一宮として社が造営されていた熊野大社の修造とする方が妥当である。七世紀から八世紀にかけて出雲国では出雲國造が居住する意宇郡が中心地であり、熊野大社が一宮であった。その後、律令国家体制が確立するに伴い、記紀神話が形造られ、次第に出雲大社の存在が大きくなつていったと思われる。

記紀神話が完成するのは早くて天武天皇期と思われ、出雲大社の造営時期を七世紀半ばとするには、いかにも早すぎよう。以上の考察から、『日本書紀』（齊明天年の条の嚴神之宮は、少數説であるが熊野大社とするほか無く、六五九年が出雲大社造営時期の根拠とはなり得ないと思われるのである。

自由執筆

生涯書生

千坂 精一

うで不遜であるが、

「生まれてきたのだから書こうと思う」

といえば、それは人それぞれの生きざまの問題だから、誰も彼もが書きながしていくだろう。

ダイヤモンド社から二冊目の本を出した直後に、ある経済雑誌からの依頼で『書生の自惚れ』というエッセイを書いた。

その稿でわたしは、鎌倉中期に起こつて江戸末期までつづいた上杉氏の家系に取り付き、勤務のあと毎晩のようにやつていた麻雀や、休日にはじめたゴルフをやめて、上杉氏の研究に没頭していることを書き、「だが、この上杉氏歴代のいきざまの研究を完成させることは至難の業である」として、

「終わることがないから、わたしは生涯書生なのである」と結んだ。

そのころわたしは『生涯書生』、つまり物書きに徹しようと思っていたのだ。

『書生』とは見てのとおり『書く』と『生まれる』を結合させた熟語であるが、「わたしは書くために生まれてきたのだ」といえば、乏しい才を隠して自慢するよ

隔号に執筆の順番がまわってきた。

このとき決められたのが行数指定である。たとえば、五十行と指定されたらそれ以上でも以下でもいけなかつた。

出版社は枚数指定だから、最後の一枚のなかで遣り縁りすればよかつた。

史遊会の行数指定は厳しかつたが、しかに突然今野信雄氏から電話があつてわたしの勤務している会社へ訪ねてこられた。

女子社員に応接室へ案内してもらつておいてわたしが出向いたとき、今野氏はまだコーヒーに手をつけておられなかつたから

たいして待たせたとも思えなかつたのだが、今野氏は持ちまえの野太い声で自己紹介もそこそこにいきなり用件に入り、

「あなたの著書を読んだ。ほかに六人選択したから、八人で歴史の会を立ち上げよう」と性急に誘つてきた。否やはなかつた。

翌年一月の発起人会の席上で今野氏は、「この会は歴史物の書き手集団ですからね」と念をおされた。

全会員が毎月出版社から原稿依頼があることは限らないから、書くための会報をつくることになり、「史遊」とした。はじめのころは会員数が少なかつたので、

自由執筆

音楽と源氏物語

小田 紘一郎

音楽といつても、クラシック、演歌、民謡など様々なものがあるが、特に関心の高いのはクラシックである。それに関心・興味があいたのは高校時代であるが、本格的に熱中し始めたのは役所に入つてからである。現実逃避からであつただろうか、それとも日常を超えた世界、精神的なものへの憧れだったからだろうか。

最近では、時間があり余る程あるのでよく聞く。妻が外出した午後などボリュームを大きくして聞くが、あつという間に豊かに幸せに半日が過ぎる。

音楽には、三つの楽しみがある。

一つは、作曲家毎のものである。バッハから近代まで著名な作曲家は折り数えても二十人をはるかに超えるであろう。人間には当然個性があり、まして天才にはそれぞ異なるた作風がある上に時代をも反映していくユニークなものが多い。あえて言えば、春はモーツアルト、夏はベートンヴ

エン、秋は Brahms、冬はチャイコフスキーアでろうか。私にはそんなように感じられる。

二つは、一人の作曲家の生涯と作品である。青年時代、中年時代、晩年時代とそれぞの作曲家が人生の経験、苦悩、喜びを通じて作品の姿が変わっていくことである。

就中、若い頃最も熱中したベートーベンなどその典型であつて、中期の傑作の森と言われる諸作品（運命・田園・皇帝等々）と晩年の諸作品は全く異なる。同一の作曲家のものとは思えない。

マーラーの交響曲も、青春の気に満ちた交響曲一番と、晩年の死に直面して書いた九番とは全然異なっている。それらからは人生を生き貫いた姿がはつきりわかるのである。

三つは、演奏家による違いである。私の最も好きで、これまで何百回も聞いたであろうベートーヴェンの第九交響曲（いわゆる合唱）の第三樂章など、フルトヴェングラーは二十分、カラヤンは十六分、小沢は十三分台である。第九番の第三樂章（アダージオ・モルト・エ・カンタービレ）は、

真善美に対する憧れであり、生きることへいたら朝から夜まで演歌をやっていた。

最近は、源氏物語をよく読んでいるが、文学と音楽の違いはあるものの、何か共通点があるように思えるのである。文字は、言語ではつきり伝えてくれるが、音楽は曖昧模糊としており、何を語りたいのかなかなかわからない。わからないから逆に一層興味がわき何回でも聴きたくなる。

ベートーベンの作品と源氏物語の帖との部分が相関があるか、類似点があるか等比較してよく考へることがある。

「若菜」の巻は交響曲第九番（合唱）、「賢木」の巻は第三番（英雄）、「胡蝶」の巻はピアノ協奏曲第四番、「宇治十帖」は後期の弦楽四重奏（第十二番～十六番）あたりであろうか。源氏物語の各巻のストーリーを音楽にあてはめたりしながら楽しんでいる。でも源氏物語に一番近いのは、マーラーではないかと最近はよく思う。

今年の正月田舎に帰りB.S放送を流して

現役時代、地方に単身赴任した折、よくマイクをにぎり演歌に熱中したことがあつた。その頃を思い出しながら歌を聞いてみると、なぜか不思議なくらい源氏物語の場面が浮かんできた。

例えば「嵯峨野の女」（乱れてしまえばすむことでした それが出来ずに別れてきたのかたく結んだ女帯）は「賢木」の巻の光源氏と六条御息所の別れの場面、この時物語の女は帯をといたであろうか。又、「長良川艶歌」（そえぬ定めと知りながら 今は他人でない一人）は「薄雲」の最後の場面の光源氏と明石の君の贈答歌を思われるし、「夫婦坂」（この坂を越えたなら 幸せが待っている そんな言葉を信じて こえた大坂四十坂）は源氏の浮気に生涯悩み続けた紫の上の心境を思わせる。「矢切の渡し」（つれて逃げてよ ついておいでよ 親の心にそむいてまでも）は「浮舟」の巻の匂宮と浮舟の恋の道づれにそつくりである。

千年前の源氏物語の世界と現在の艶歌の世界は、いざれも人生を描き男と女の関係を語っている点ではまったく同じであるようと思えてならない。

自由執筆

「残杯と冷炙と 一旅食す、京華の春ー」

中込 勝則

杜甫は、開元二十三年（七三五）、二十四才の時、五年に及んだ吳越（江南地方）の旅から帰り、科挙の進士科に応じたが下第した。その後ふたたび齊趙（山東・河北地方）に遊び、三十才のとき洛陽に戻つて結婚。しばらくは洛陽にあって文人達と交友。三十三才の時には李白・高適などと山東に旅し、三十五才の時に洛陽から初めて長安に上つた。これは父親の杜閑が長安付近の県令となつていたのでこれを頼つてのことである。

天宝六載（七四七）杜甫三十六才のとき、玄宗は制科という科挙を行なつた。これは進士科とは異なり、一芸に秀でたものを招いて考課し登用するというものであつた。しかし、この試験では宰相李林甫のわるだくみによつて全員が落第となつた。李林甫は優秀な人が登用されわが足下を脅かされることをおそれて、尚書省に命じて全員を

落第させ、玄宗には「野に遺賢なし」と奏上したのである。

この外第は杜甫にとつて落胆が大きかつた。前回はまだ若くいすれ合格は出来るものという心の余裕があつたが、今回は結婚もし、三十六才になつてからである。

彼は、長安にあつて文人達と交友する一方で、自分を引き立ててくれそうな高官・要路に詩を贈り、任官運動に懸命となる。

天宝七載、杜甫は、彼が故郷の洛陽にあつたころ河南の長官であつた韋濟が色々と目をかけてくれていたが、その韋濟が中央の尚書左丞となつてゐたので、まずこれに「韋左丞丈に贈り奉る二十二韻」という詩を贈つた。その中で言う。

「甫、昔、少年の日早く觀國の賓に充てらる。讀書萬卷を破る。筆を下せば神あるが如し。· · 自ら思へらく頗る挺出す。立ろに要路の津に登り、君をして堯舜の上に致し、再び風俗を淳ならしめんと」と。

觀國の賓とは天子が天下の人材を都に招いて科挙を行うところから、その招かれていく受験者をこう呼んだもので、杜甫が若い日に科挙に応じたことをいつている。彼の心中には、科挙に合格して政治の中

心に進出して、天子を補佐して堯舜よりもよりもすぐれた天子にし、天下の風俗を淳ならしめようとの大望があつたわけだが、科挙に下第したことによつて、この意は偽いものとなり、世間から埋もれた隠者でもないのに道を行歌して歩いている始末。

『驢に乘る三十載、旅食す京華の春。朝に富児の門を扣き、暮に肥馬の塵に隨う。殘杯と冷炙と。致る処潛に悲辛』と、

朝には金持ちの家の門をたたき、夕方には高官の肥えた馬の塵の後にしたがつて、飲み残しの酒と食べ残しの冷えた焼肉で空腹を満たしているあります。この併で仕方がないので都を離れて東の方海中にもどり、暇をつけて去ろうとしているあなたに暇をつけて去ろうとしている苦しい状況をお察しください。と。

杜甫がこのころ引き立てを求めて詩を贈つた相手は韋濟だけではなく、

○汝陽王に対する『特進汝陽王に贈る二十韻』 ○京兆尹鮮于仲通に対する『鮮于京兆に贈り奉る二十韻』 ○翰林学士張垍に対する『翰林の張四学士垍に贈る』 ○河西節度使判官田梁丘に『田判官梁丘に贈る』 ○開府儀同三司・河西節度使の哥舒

翰に贈った『哥舒開府翰に投贈す二十韻』

など。韋濟にはその後も『韋左相に上る二十韻』を贈り引き立てを頼んでいる。詩はいずれも贈る相手の功績をたたえ顯官の地位にあるを喜び、それに引換えいまの自分は才能はあるのに世に認めてもらえず、市井に埋もれての生活の窮状をうたい、なんとか引き立てていただきたいと訴えている。

時代は玄宗皇帝治世の後半にあたり、玄宗は政治に倦んで楊貴妃との恋におぼれ、政治は宰相李林甫と、その亡きあとは楊國忠にまかせきりで、その後興る安録山の乱の前夜であつた。折悪しく天宝十三載（七五四）は、長安地方には長雨が続き、不作から米価が高騰して庶民は苦しんだ。杜甫もただでさえ苦しい家計が更に圧迫されたので、衣食のために妻子を長安からずつと北の奉先県に妻の縁者を頼つて疎開させた。

やがて、懸命の任官運動が実を結んだのか、天宝十四載（七五五）、官より右衛率府胄曹參軍にはじめて任せられた。この職は名前はいかめしいが近衛軍の武器庫の管理係で従八品下の下級官吏である。

このとき杜甫四十四歳、長安に上がつて

から実に八年の歳月が流れていった。

杜甫の詩風をみると、若い頃から老年

にいたるまでかなり変化していくのであるが、この時代までは自分のことが精一杯で、彼の詩の最大の特徴たる社会的弱者・庶民への同情、そしてその悲惨さをもたらしている政治のあり方への批判などはまだ現れてはいない。しかし、この八年の辛酸をなめることによつて、政治のあり方への批判・自分ならばこうやるとの思いは常に抱き続ける一方で、彼の目線は、弱い庶民への同情に向いていった。

安録山の乱後、彼の詩風は一変する。彼の代表的な長詩『北征』『彭衙行』『三吏三別』など、いわゆる杜甫の社会詩といわれる詩が多く作られるようになるが、これは長安における苦節の時代とその後の安録山・史思明の乱の苦難を経たことによるものであった。

その意味からして、長安の苦節十年は、彼の詩風の目線がそれまで政治の中権のみに向けられていたものが、社会の下層にまで下がつて社会全般に向けられて厚みを増し、肺腑をえぐるような杜詩の傑作が生まれ出される搖籃となつた時期といえる。